

# 1968年と宗教

◆絳秀実「この雑誌（『地球ロマン』）が総体として偽史的創造力の肥大化と70年代以降の左派の転換を、靈的ポリシエヴィズム=靈的ファシズムとして統合しようと目論んでいることは動かないだろう。」——絳秀実『1968年』ちくま書房、2006年、217頁◆武田崇元「我々はずっとファシズム=悪という見立てできたわけだけど、ファシズム上等という観点から日本史を見直し、そういう方向で叙述することも出来るんちがうかと思うたわけです。」——武田崇元「願わくはこれを語りて平和を戦慄せしめよ」『文化／批評』5号、2017年、45頁◆栗田英彦「いふならば、彼は社会から出る領域に渡る超越的な原理を追求し、現実化し、保持し続けようとした原理主義者であった。それゆえにこそ、無自覚的なものも含め、あらゆる種類の原理主義に徹底的に対峙することができたのである。」——栗田英彦「革命と修養」『日本思想史学』49号、2017年、146-147頁◆鎌倉祥太郎「津村が目指した「革命」は、未だに継承可能なものとして残されている。」——鎌倉祥太郎「津村喬における「日常性」批判の射程」『文化／批評』2号、2010年、90頁◆村山由美「日本基督教団は全国の学生紛争と同じくして、いわゆる「教団紛争」と言われる混乱期に突入することになる。」——村山由美「日本のキリスト教という語り」『文化／批評』6号、2014年、15頁◆川村邦光「「死者の視野」を思索する“臨死者の視野”、それが全共闘運動の自己否定の視角として樹立しようとしたと言える。今日はやっている、死者に寄り添うといった、思い入れたっぷりの情緒的な迎合路線ではない。」——川村邦光「高橋和巳、「わが解体」の途上にて」『文化／批評』2018年夏季臨時増刊号、148頁



## 全共闘以後の「革命」のゆくえ

公開シンポジウム

絳秀実  
川村邦光  
村山由美

12・15  
13:00~17:30

武田崇元  
鎌倉祥太郎  
栗田英彦

京都大学人文科学研究所  
大会議室



# 1968年と宗教—全共闘以後の「革命」のゆくえ—

日時: 12月15日(土) 13:00~17:30

場所: 京都大学人文科学研究所 大会議室

1968年の革命、それは人間的で解放的な大衆運動であったと理解されている。依拠する思想がマルクスであろうがなかろうが、全共闘運動は、「宗教」を含む既成の権威に対抗するものであった。だが全共闘以後、活動家たちのなかには、宗教的、またはスピリチュアルな思想運動に関わる者もいた。それは、挫折や転向と見られてきた。

しかし現在でも、日本赤軍が根拠地を創った中東では、イスラーム原理主義が〈帝国〉への死を賭した戦線を維持し、〈帝国〉の中心では、福音派が大きな政治勢力として存在感を主張し続けている。その意味では、「宗教」は、歴史の終焉後のイデオロギーなのだ。

これこそが、1968年の盲点なのである。われわれは、これを「1968年と宗教」というテーマで真正面から問う。それは単に1968年を回顧するためには決していない。1968年の叛乱が、そして全共闘以後の革命が、われわれを連れて行く地点を見定めるために。

## 絳秀実 (すが・ひでみ)

文芸評論家。

主な著作: 『1968年』(筑摩書房、2006年)、『吉本隆明の時代』(作品社、2008年)、『アナキスト民俗学—尊皇の官僚・柳田国男—』(筑摩書房、2017年)、『増補 革命的な、あまりに、革命的な—「1968年の革命」史論—』(筑摩書房、2018年)

## 武田崇元 (たけだ・すうげん)

八幡書店社主。

主な著作: 『定本 竹内文献』(八幡書店、1999年(編集)) 『新約 出口王仁三郎の霊界からの警告』(学研パブリッシング、2013年)、『願わくはこれを語りて平地人を戦慄せしめよ』『子午線』5号(書肆子午線、2017年(インタビュー))

## 川村邦光 (かわむら・くにみつ)

民衆文化研究。

主な著作: 『弔いの文化史』(中央公論新社、2015年)、『高橋和巳、「わが解体」の途上にて』『文化/批評』2018年夏季臨時増刊号、『出口なお・王仁三郎—世界を水晶の世に致すぞよ—』(ミネルヴァ書房、2017年)

## 鎌倉祥太郎 (かまくら・しょうたろう)

思想史・日本現代史。

主な著作: 『津村喬における「日常性」批判の射程』『文化/批評』2号(2010年)、『津村喬と『月刊焼酎通信』—1980年代におけるミニコミの想像力—』『文化/批評』8号(国際日本学研究会、2017年)

## 村山由美 (むらやま・ゆみ)

宗教学・キリスト教研究

主な著作: 『日本のキリスト教という語り』『文化/批評』6号(国際日本学研究会、2014年)、『"Yanaihara Tadao's Intellectual Resistance against the Asia-Pacific War" in Japan's Asia-Pacific War as Lived and Remembered, Uni. of Hawaii Press, forthcoming.

## 栗田英彦 (くりた・ひでひこ)

宗教史・思想史。

主な著作: 『明治三〇年代における「修養」概念と将来の宗教の構想』『宗教研究』89巻3号(日本宗教学会、2015年)、『革命と修養—木下尚江はなぜ静坐をしたのか—』『日本思想史学』49号(日本思想史学会、2017年)

順不同

13:00~13:15 趣旨説明・登壇者紹介

13:15~13:45 川村邦光  
「高橋和巳と1968年前後—未成へ向かう臨死者の眼—」

13:45~14:15 鎌倉祥太郎  
「1968年の身体—津村喬における気功・太極拳—」

14:15~14:45 村山由美  
「田川建三における大学闘争と宗教批判—観念と現実のはざま—」

(休憩 15分)

15:00~15:30 武田崇元  
「神々の爆発—1968年と〈民衆宗教〉観の変遷—」

15:30~16:00 絳秀実  
「柳田国男と戦後民主主義の神学—1968年の視点からの照射—」

16:00~16:15 栗田英彦  
コメント「近代主義を超えて」を超えて—宗教研究と1968年—」

16:15~17:30 登壇者リプライ&全体討論

司会: 栗田英彦

## 本館(新館)

〒606-8501 京都市左京区吉田本町

TEL. 075-753-6902

FAX. 075-753-6903

E-MAIL annai@zinbun.kyoto-u.ac.jp

京大農学部前の信号を南側に渡る(または百万遍交差点から東に向かい、最初の信号を右折)。

北門をくぐって最初の右側の建物です。



bodyandpolitics@gmail.com (栗田) \*出席を希望される方は、左のメールアドレスまで事前にご連絡ください。

主催: 科研「日本新宗教史像の再構築:アーカイブと研究者ネットワーク整備による基盤形成」(課題番号18H00614)

後援: 科研「雑誌メディアによる戦後日本の秘教運動の宗教史的研究」(課題番号17K02244)